



郊外再論 : 反都市の系譜

平山, 洋介

(Citation)

都市計画, 71(2):20-23

(Issue Date)

2023-03-15

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(Rights)

本著作物の著作権は日本都市計画学会に帰属します。本著作物は著作者である日本都市計画学会の許可のもとに掲載するものです。ご利用に当たっては「著作権法」に従うことをお願いいたします。

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100483086>



郊外再論

—反都市の系譜

Re-Examining the Suburb —Genealogy of Anti-Urbanism

平山 洋介 神戸大学
Yosuke HIRAYAMA

都市の感情

公共空間としての都市の特徴は、そこに住む人間の数が多く、その人びとが、年齢または世代、生い立ち、所属する階層、エスニシティ、政治上の傾向、見た目と振る舞い方などに関し、一人ひとり違いをみせ、それにもかかわらず、同じ空間を共有する、という点にある。だから、そこには、ほぼ必ず葛藤が生まれる。

多くの人たちは、自分と同じような隣人とコミュニティを形成し、そこに落ちついて定住することが人生の安全と安心に結びつくと思像する。その一方で、コミュニティから抜けだし、さまざまな人に出会い、人生をつくる新たな機会を得るために、移動と挑戦を選ぶ人たちがいる。同一の人間のなかでさえ定住／移動、秩序／混沌、帰属／自由、安定／挑戦……を同時に求める気持ちが混ざっていることは、まったく珍しくない。最初の近代詩人の一人であったシャルル・ボードレー（1999 [1863]）は、近代性というものが変化・漂流・偶発と永遠・不変の両方への欲求を意味すると1863年に論じた。この近代性とは、都市性とほとんど同義である。農村の伝統共同体を失い、都市に流れ込んだ人びとは、自由と新たな帰属の双方をともに欲する不安定な感情をもっていた。このことは、現在にいたるまで、たいして変化せず、おおむね普遍の傾向として、都市の特性を構成し続けている。

恐怖の建築

都市を豊かにするのは、公共空間の葛藤である。ところが、葛藤とともに生きることは、けっして快適とはいえず、それどころか苦しい経験になるとしばしば想像された。これを一つの理由として、近代都市計画の制度がつくりだされ、その枠組みのなかに、葛藤の除去をめざす反都市の方針が埋め込まれた。郊外とは、この社会技術の産物である。前世紀の初期までに、工業都市に広がる無秩序と混沌、貧

しい労働者の群れ、不衛生かつ過密な住環境、そこから発生する疫病、工場の騒音と煤煙などは、増えはじめた中間層にとって、逃れるべき恐怖の対象となった。都市を離れ、郊外に良質の住まいと環境を求めた人たちは、社会・経済・政治上の同質さの程度の高いコミュニティを形成し、安全・安心な“ブルジョワ・ユートピア”をつくろうとした（フィッシュマン、1990 [1987]）。

近代都市計画とは、リチャード・セネットによれば、排他の技芸にほかならない（Sennett, 1970）。空間用途を分離・純化するゾーニング、貧困を拡散させるスラム・クリアランス、無秩序を一掃する街路事業などの空間整理の技法は、都市を物的に整備するだけでなく、それを通じて、“違う人たち”を社会・空間の中心から切り離し、秩序を管理するために使われた。セーヌ県知事であったジョルジュ・オスマン男爵による19世紀半ばのパリ大改造が大がかりな街路整備をとめない、交通処理に加え、労働者の暴動に対する迅速な軍隊派遣、社会・経済階層ごとの地区分割を可能にしたことは、知られているとおりである。オスマンは、都市の社会パターンを管理しやすい方向に転換するには、社会構造の変化を待つより、物的景観に「外科手術」を施す方がずっとたやすいと考えていた。アメリカの近代都市計画が19世紀末から20世紀初頭にかけて成立するプロセスを描いた渡辺俊一（1977）によると、それは、非白人を断固として排斥する白人中産階級のコミュニティ理念に根ざしていた。ここでの計画技術は、物的コントロールのかたちをとっているが、敷地規模の下限設定などによって、“排斥的地域制”を形成し、異人種の排除による社会秩序の保全を目的とした。

ナン・エリンは、都市計画の歴史展開における“恐怖の建築”の役割を論じた（Ellin, 1995）。工業都市の無秩序がもたらす恐怖から逃れようとするうえで、社会・経済階層、エスニック・グループ、世代、ジェンダーの混合は混

乱の源泉とみなされ、それらを分類・分割するゾーニングが必要とされた。適切な住居は戸外の「嵐」から住人を隔離・保護するシェルターの役目をはたすと考えられた。ケヴィン・ロビンズが指摘したように、ル・コルビュジェによる勇壮な「輝く都市」の提案に内在したのは、都市の無秩序に対する深い恐怖であった（Robins, 1995）。混乱が「われわれの都市に織り込まれ」、パリは「征服、発展、移住によってあちこちから集められた人びとの危険なマグマ」と化したと述べるコルビュジェは、「浸水、大洪水、侵略」の感覚にとりつかれ、「われわれの手におえなくなった状況に秩序を取りもどす」ことを望んだ（Le Corbusier, 1947 [1924]）。

純粋なアイデンティティ

戦後のアングロサクソン諸国および日本では、郊外住宅地が増え、そこに住む人たちは、コミュニティのアイデンティティ構築に取り組んだ。結婚と家族の安定、適切な子育て、職業と収入の安全、隣人との友好関係、適正な振る舞い方などが郊外のアイデンティティをつくると考えられた。中産階級の家族は自分たちの住む住宅を所有した。クレイグ・ガーニーは、持ち家を「正常」とし、借家を「異常」とみなす「誇りと偏見」の言説を分析し、「良き市民」の住まいが持ち家であることを「当たり前」と位置づけるメカニズムの存在を指摘した（Gurney, 1999）。

郊外コミュニティが農村の伝統コミュニティとまったく異なるのは、その形成が必要と経験にもとづかない点である。農村では、生産と消費の多くの面で、人びとの助け合いが不可欠で、その実践の蓄積がコミュニティの基盤になる。郊外の生活では、住人の協力関係は必須になるとは限らない。このため、郊外コミュニティのアイデンティティは、想像と構想に依存する度合いが高く、それだけに過度に純粋になることがあった。

郊外の住人たちは、都市の葛藤をつくる不意打ちのもの、異質なものの、未知のもの、そして予見できないものを、経験することなく、あるいは経験せずにすまずために、あらかじめ排除することで、アイデンティティを維持しようとした。その純化を求めるコミュニティは、「内部」を守るために、「外部」の想像と構築を必要とし、「違う人たち」を排斥する傾向をみせた。

前世紀のアメリカでは、白人中産階級の郊外が広がるにしたがい、そこに移住しようとする黒人を排除するコミュニティ運動がしばしばみられた。これは、セネットによると、黒人差別それ自体であるよりも、異人種の流入にともなう摩擦発生の可能性、それに関する多くの交渉と調整の

煩雑さを想像し、あらかじめ回避することで、アイデンティティの混濁を防ぐ意味をもっていた（Sennett, 1970）。コミュニティの一貫性を重視するのは、一戸建て住宅に住む中産階級だけではない。高度成長期の日本では、郊外に大規模な公共住宅団地が開発された。ここに左翼教育の支配する「コミュン」形成が1970年代に構想され、関連団体の唱道する「学級集団づくり」のもとで「民主的」に決まったルールに従わない子どもたちを排斥するおそるべき抑圧が横行したことを、原武史（2007）が自身の体験から書き残している。一戸建て住宅のコミュニティであれ、団地コミュニティであれ、保守派であれ、革新派であれ、それらすべてにおいて、アイデンティティの純粋さの追求は全体主義の運動を反映・促進する。

家庭が大切

郊外コミュニティでは、家庭を大事にすることに最高レベルの価値があるとされ、それは反都市の方針と表裏一体の関係を形成した。公共空間としての都市の葛藤は、自宅を出て、いろいろな人と出会い、交差・接触してはじめて経験される。しかし、「違う人びと」の振る舞い方を恐れる人たちは、郊外に逃れ、私有住宅のなかで自身の家庭をいとなむ作業に集中した。ここでの適正な家庭は、「良き市民」の表徴となった。

私的領域の家庭と公共空間をつくる都市は、対立関係にあるとみなされた。都市社会では、あらゆる事柄、たとえば仕事、収入レベル、人間関係などが永続することはほぼありえないし、将来に何が起るのかは予想できないと考えられている。ところが、郊外に住む中産階級の家族は、家庭の運営と子育てはコントロール可能で、結婚は永続し、子どもは立派に育つと予定し、仕事を失うことはまずないし、所得が減ることもほぼありえず、持ち家の資産価値は上昇ないし安定すると想定した。ここに潜むのは、自宅の外に出て、さまざまな人たちが混じり合う予見可能性の低い都市に触れることは家庭の安寧を脅かす、という経験にもとづかない仮説である。こうして郊外の家庭は、想像上の「嵐」から家族メンバーを守る「島」となったが、その代償として、都市の豊富な葛藤を経験する機会から遠ざけられ、ときには退屈と窒息の感覚さえともなう沈滞した雰囲気におおわれた。

ジェンダー化というゾーニング

近代都市計画における中心技法の一つであるゾーニングは、空間をジェンダー化し、男女の領域を区分けする役割をはたした（ハイデン, 1991 [1984]；Wilson, 1992）。

それは、郊外コミュニティの秩序を維持し、家庭の適正さを保つために、必要とされた。住宅地と職場は切り離され、郊外の土地利用は住宅と生活関連施設に特化した。稼ぎ手の男性は都心のオフィスに通勤し、郊外は母子向けの空間として設計された。

郊外住宅地の構成は、多くの場合、近隣住区理論にもとづき、小学校を中心とするコミュニティを単位とした。それぞれのコミュニティは、幹線道路に囲まれ、内部を通過する道路を排除し、公園、集会所、店舗などを備えた。近隣住区理論をまとめたクラレンス・アーサー・ペリー（1975 [1929]）は、住宅地の設計技法の検討において、——ほとんど見すごされているが——暗黙のうちに、ジェンダー化した家族・空間像をふまえていた。たとえば、ペリーによる人びとの往来についての推計は、「普通の4人家族」を対象とし、夫は都心の職場と行き来し（週6日）、近隣内では散髪屋、新聞売り場または映画（週2日）、教会・社会的訪問など（週1日）に行き、妻は近隣内の市場（週3日）、薬局、商店または事務所（週1回）、社会的訪問など（週2日）に行く、といった想定に立脚した。ここでは、夫婦がジェンダー化した役割分担にもとづき、ほぼ完全に個別に行動することが、ごく「自然」に描かれている。

都市のジェンダー化を論じたエリザベス・ウィルソンによれば、空間をコントロールする技術のもとで、女性は監視と抑圧の対象となってきた（Wilson, 1992）。女性の都市への侵入は、混乱の兆候とみなされ、その不安定さとセクシャリティのイメージのために、ヒステリカルと恐れられた。女性が住居を離れ、男性をとまわずに都市に現れることは、公／私空間の区別と配置についての伝統を壊し、かつて厳格であった家父長制のコントロールが弱まったすべての領域における無秩序の脅威を象徴した。この文脈において、郊外コミュニティのジェンダー化した空間は女性を住宅と近隣住区につなぎとめ、管理下に置く効果をもつと期待された。

遍在する「郊外」

郊外住宅地の増大は、20世紀後半にみられた現象であった。しかし、この郊外を出現させた反都市の都市計画は、時代と地域を超えて、さまざまなかたちをとって展開した。この意味で、「郊外」は遍在し続けている。

前世紀末から新たな世紀にかけて、資本・労働力・商品・知識・イメージなどのグローバル・フローの拡大は、市場競争を促進するイデオロギーに支えられ、多くの地域の政治経済と空間を再編した。世界都市の地位をもつ大都市の多くでは、アンディ・メリフィールドのいう“ネオ・オス

マン化”に沿って、新たな「外科手術」が加えられ、オフィス、消費施設、超高層住宅などのメガ・コンプレックスが建ちあがると同時に、社会・経済階層の空間上の再配置が進んだ（Merrifield, 2014）。エリンによれば、グローバル化によって、経済・金融・社会が不安定化し、伝統文化の維持が困難になるなかで、かたちを変えた“恐怖の建築”が増えた（Ellin, 1995）。たとえば、ノスタルジーのデザインを施した住宅地と消費施設の増大は、過去の都市景観をより美しく再構築し、そこに閉じこもることで、グローバル化のもたらす不安から逃れようとする企図を含意した。

ジェイン・ジェイコブズ（2010 [1961]）がル・コルビュジェをはじめとするユートピアンを非難したのは、その仕事があからさまに反都市をめざしたからであった。ジェイコブズは人びとの多様性に根ざす都市の持続の必要を主張し、その考え方は広い範囲から共感を集め、長く受けつがれてきた。ジェイコブズの仕事を一つの契機として、郊外の画一性についての言説がさらに増えた。その一方、アーバンビレッジをつくろうとする運動が展開した。これは、ジェイコブズの系譜に連なるプロジェクトであるかのようにみえる。しかし、アーバンビレッジは、“下町ノスタルジー”にアイデンティティを求め、完結した「村」の親密なコミュニティ形成を志向する点で、「郊外」の側面をもち、ジェイコブズが救おうとした都市のあり方とは必ずしも同じとはいえない中身を有していた。

東京を競争力のより高い世界都市に改造しようとする政策のもとで、都心とウォーターフロントの「空」を売るために、多数のタワーマンションが建てられた（Hirayama, 2017）。この新型の建物は、外部の社会・空間文脈から切斷され、“要塞”のように閉じた内部をもつ垂直の「郊外」を構成した。東京の中心部では、エリアマネジメントが展開し、にぎわいの演出、イベント開催、地域ブランディングなどの実践が賞賛を集めた。公園の再生のために、民営化と消費施設の配置が進められ、その物的整備と集客増もまた成功と評された。しかし、エリアマネジメントにせよ、民営化した公園にせよ、これらのプロジェクトは、美化した空間を囲い込み、そこにふさわしい消費者を歓迎する一方、身なりの貧しい人たち、消費力の低い高齢者、くたびれた様子の中高年層などを寄せつけず、かつて公共空間を行き交っていた人たちのなかから、望まれる／望まれないグループを選びわける効果を生んだ（平山, 2019）。

反都市の景観をつくるのは、建造環境だけではない。新型コロナウイルスの感染拡大のために、人びとは「社会的距離」をとることを求められ、他者に接近しないことが正しい振る舞い方となった。広い家に住み、テレワークが可

能な職種の人たちは、自宅に閉じこもり、さまざまな食品・日用品の配達を必要とした。仕事・収入が消失ないし減少した人たちの一部は、低賃金の配達業務に携わった。配達する／されるグループの対比は、社会・経済階層の分裂を可視化した。電車に乗ると、ほとんどすべての乗客がスマートホンの画面を凝視し、その多くはイヤホンを装着している。すでに見なれた光景である。車両のなかは、公共空間を形成する。しかし、乗客たちは、それぞれのスマートホンに意識を向け、それぞれの作業に没頭する。同じ電車に乗り合わせた人たちが物理的に共有し、意識上では共有しない空間は、依然として公共空間なのかどうかという問いがありえる。

都市をもう一度

小稿で述べたのは、都市は、なぜ、都市なのか、都市の条件とはどういうものか、反都市のプロジェクトはどのように展開するのか、を問いなおす必要である。ロビンスは、都市に入ってくる“異なる人びと”を「見知らぬ天使」と呼び、彼らが刺激するアンビバレントな感情を論じた (Robins, 1995)。違う社会・文化圏からやってくる人たちは、混乱を持ちこむようにみえるが、同時に、挑戦と出会いの機会をもたらし、彼らへの恐れの中の感情の裏側には、憧憬の気持ちがある。この文脈で、「見知らぬ天使」を受け入れる空間は、人びとの葛藤を保ち、都市を成立させる条件をつくる。ウィルソンによれば、都市のなかで、女性が恐れられているとすれば、それは、女性が求められ、必要とされていることを表し、外国から流入する人たちが不安をかきたてるとしたら、それは、移動と自由へのあこがれの感情を含意する (Wilson, 1991)。

はっきりしているのは、純粋なアイデンティティは持続しないということである。郊外住宅地は、時間がたつにつれて、変化した。若い夫婦が子どもを育てる場であったコミュニティでは、一人ぐらしの老人が増えた。小中学校には教室の余剰がみられ、高齢者の居場所は足りない。郊外住宅地の多くで、マテリアルな豊かさを象徴していた持ち家の資産価値は下がり続けた。中間層の住人は減少し、増大する高齢者の所得は下がる。大都市圏では、“貧困の郊外化”が進みはじめた。郊外はすでに均質さを失い、その内側から差異が増え続けている。

求められるのは、都市の価値をもう一度とらえなおし、再評価する仕事である。不安を抜きにして自由は得られないし、リスクをとまなわない挑戦はありえない。予見できないもの、未知のものは、想像上の恐怖であったとしても、実際に çık かわしてみると、喜ばしい驚きを与えてくれるこ

とがある。自分とは異質の人たちとの出会いは、確かに面倒な経験になることはあるが、自己の再発見にもとづく成長または成熟の機会につながることもある。ジュリア・クリステヴァ (1990) は「驚くなかれ、外国人はわれわれ自身のなかに住んでいる」と書いた。

郊外に限らず、反都市のプロジェクトは、かたちを変えて、あちこちに出現する。しかし、述べたように、純粋なアイデンティティが長く保たれることは、まずありえない。郊外の人たちは、時間がたち、差異が拡大するなかで、街をどうつくりなおすのかを問われる段階にある。そこでは、違う人たちが接近し、必要と経験を根拠とする新たなコミュニティが生まれるケースがある。ここに示唆されるは、さまざまな「郊外」をつくったとしても、それは、時間のなかで、変化せざるをえず、「都市」化に向かう可能性をもつ、ということである。

しかし、都市を維持するには、反都市の空間が内側から崩れるのを待つだけでは、まったく不十分である。都市が都市として存立している理由は、自然に与えられるものではないし、その持続は当然ではない。それへの脅威は、ネオ・オスマン化からパンデミックまで、幅広い。都市が社会の意志によって構築し、守るべき価値であることを、あらためて知る必要がある。

<参考文献>

- シャルル・ボードレール (阿部良雄 訳), 1999『ボードレール批評 2』ちくま学芸文庫 (原著 1863 年未見)。
Ellin, N. (ed.), 1997, *Architecture of Fear*, New York: Princeton Architectural Press.
ロバート・フィッシュマン (小池和子 訳), 1990『ブルジョワ・ユートピア』勁草書房 (原著 1987 年)。
Gurney, C. M., 1999, *Pride and prejudice*, *Housing Studies*, 14(2).
原武史, 2007『滝山コミュニティ 1974』, 講談社。
ドロレス・ハイデン (野口美智子ほか 訳), 1991『アメリカン・ドリームの再構築』勁草書房 (原著 1984 年)。
平山洋介, 2019「誰のためのオープンスペースか?」横文彦 (編)『アナザーユートピア』NTT 出版。
Hirayama, Y., 2017, *Selling the Tokyo sky*, in Forrest, R. et al., (eds.) *Cities and the Super-Rich*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
ジェイン・ジェイコブズ (山形浩生 訳), 2010『アメリカ大都市の死と生』鹿島出版会 (原著 1961 年)。
ジュリア・クリステヴァ (池田和子 訳), 1990『外国人』法政大学出版局 (原著 1988 年未見)。
Le Corbusier, 1947, *The City of Tomorrow*, London: Architectural Press (原著 1924 年未見)。
Merrifield, A., 2014, *The New Urban Question*, New York: Pluto Press.
クラレンス・A・ペリー (倉田和四生 訳), 1975『近隣住区論』鹿島出版会 (原著 1929 年未見)。
Robins, K., 1995, *Collective emotion and urban culture*, in Healey, P. et al. (eds.) *Managing Cities*, West Sussex: John Wiley & Sons.
Sennett, R., 1973, *The Use of Disorder*, London, Penguin.
渡辺俊一, 1977『アメリカ都市計画とコミュニティ理念』技報堂出版。
Wilson, E., 1991, *The Sphinx in the City*, Berkeley, U. of California Press.